

## II-1-1

## アイヌの捕鯨文化

早稲田大学  
児島 恭子

この報告では17世紀から20世紀初頭の北海道アイヌの伝統文化における鯨と人とのかかわりを述べた。鯨と人間とのかかわりや鯨利用文化についての多くの著作にはアイヌのそれについても言及されている（とくに福本1960、秋道1994、森田1994、山下2004）。近現代のアイヌの鯨利用についても（岩崎2002）、また北方民族の海獣狩猟の視野からの研究（渡部1992）やアイヌの鯨の加工品生産についての歴史的研究（菊池2002）の成果がある。蝦夷地についての文献資料にみえる鯨・捕鯨についても、ほぼこの時期の資料は紹介されている（渡部1993、門崎・関1999）。そのうえで、どのような問題があるだろうか。

## アイヌの捕鯨

アイヌは捕鯨を行なったのか、まずそれが問題となる。捕鯨を目的として定期的に出漁することは記録上ほとんどない。「くしら所々ニテ捕申事も有之よし」（1717年『松前蝦夷記』）、「東部夷地キイタツブ辺より東北の夷人は、小舟を連れ、毒箭或は刃などを鏃となして射とる」（1781年『松前志』）とあり、文化年間のエトロフ島では「この辺鯨多く、頭に牡蠣のつき候ほどの大なるが、泳ぎ戯れおり候。夷舟にてその背へ乗りかけ、毒箭をもって射申し候。」（1799年「古川古松軒老人に与ふる書」近藤重蔵書簡『近藤正斎全集』第一）という文献の記述があり、北海道東北部ではオホーツク文化の伝統の名残として積極的な捕鯨が行なわれていたと考えることもできなくはない（菊池2002）。しかし、弓矢によるこのような捕鯨が東北部では常に行なわれていたのか、あるいはかつて行なわれていたということなのかどうかもまったくわからない。オホーツク文化の捕鯨は銛でしか知られていない。

有名な『噴火湾アイヌの捕鯨』（名取1945）のなかに語られた長万部の古老の明治期の2度の捕鯨経験は漁の途中で偶然に出会ったミンククジラを捕ったものであるが、詳細な記録としては唯一の積極的な捕鯨である。噴火湾（内浦湾）の捕鯨はミンククジラとナガスクジラの1種（クッタラフンベ）のみであるという。アイヌが捕鯨を行なったかといえば、たしかに19世紀末から20世紀初頭に噴火湾で数度行われたといえるが、断片的な情報に限られている。かつてはしばしば捕鯨をおこなっていたのであろうか。しかし、多くの鯨が回遊してきた状況があっても、アイヌにはサケ・マスという食料が豊富にあり、かなりのリスクをとまなう捕鯨を行なったと考えられるであろうか？ 1858年、クヌイ（長万部）の古老タサレンカの話では、5、60年前までは長さ1丈ほどの弓、3～4尺の矢をつくり、きせるの吸口を割ってたたきひしゃげた根に毒を入れて、大勢で鯨を射かけて、朝毒矢を着けることができれば夕方には落命して翌朝には必ずその

辺りの浜に流れ着いていた、という（『戊午東西蝦夷山川取調日誌』上）。同じ長万部で弓矢の捕鯨が1800年ごろを最後に廃れて、1858年にはなかった離れ鉾による捕鯨が1888年ごろには行なわれたということなのだろうか？

なお、八雲町郷土資料館には「明治30年代にユーラップアイヌの長が舟で乗り出して捕ってきたものである」という鯨骨が展示されている。

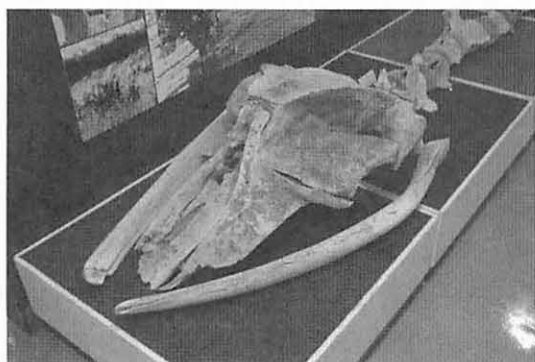


図1 八雲町郷土資料館所蔵の鯨骨

### 産物の鯨

アイヌは鯨肉や鯨油などを交易していた。古くは、松前に渡ったイエズス会宣教師のデ・アンジェリスによる「第二蝦夷報告」（1621年）にアイヌが交易のために持ってくる物のなかに書かれている。その後、江戸時代を通じて蝦夷地の産物として鯨製品が記されている。産物となる鯨の入手法は、エトロフでは「鯨は九月より末に大分寄申候」（1712年「エトロフ島漂着記」）「産物・・・次に鯨フンベなり、以前、阿部屋なるもの交易せし頃は多くありて、肉は夷の食とし、油のミ交易しても利潤足れりと也、毎年氷海解るのとき多く海岸へよる、又不時に寄事もありとそ、今は不足にして一歳三、四本ならて寄らねは産物とするに足らず、只食ひ尽す迄也、クナシリと此寫に間なる海に多くミゆる也、予、文化三寅の年五月下旬、船にて此嶋へ渡りしに、前に記せる兩寫の間遥に是を望むに、しかも其日は海上波和て鏡の面の如くなりしに、白浪天を浸し、其音雷霆の如し、舟師に是を問ひしに鯨の遊戯する也と、近く成て是を見るに、数百群をなし海上に浮ひて、或は追、或は追はれ遊び狂ふなり、斯多く有中ち、冬に至り、氷に閉られて死すにや、氷解の節、多く寄る也」（1805年『毛夷東環記』）、「鯨は寄り鯨を以て産物とする。年々場所中にては五本、八本、又は十本と寄ることあり。大なるは十尋以上にして、小なるは五、六尋なり」（1818年『北夷談』）という。ほかには「流寄り申候鯨を取上ケ」（『松前蝦夷記』）、「寄り鯨を細くさき干立し」（『北夷談』、アッケシ）とある。このように寄り鯨の利用以外の記録はなく、寄り鯨は地域によっては非常に多かったことが書かれている。鯨の加工品の数量も非常に断片的でわからない。寄り鯨は以前に比べて少なくなったことが書かれているが、減産は困るからといって積極的に捕鯨をしたという記録は今のところ見つからない。

### 寄り鯨の所有権

寄り鯨をめぐる紛争についての伝説がある。噴火湾の海岸では、流れ鯨を先に見つけた<sup>アブタ</sup>虻田の人々とその鯨が漂着した場所である有珠の人々の争いがあり、有珠が勝利したという（北海道庁1940）。同じく太平洋岸の<sup>ムカフ</sup>鶴川と<sup>サル</sup>沙流川の集落の間では、女性の川である鶴川と男性の川である

沙流川の争いで、食べ物は女が料理するものだからということで、鶴川6分、沙流川4分で分けることになった(更科1981)。さらに東の春立海岸では三石と布辻の引っぱり合いとなり、三石の人々が手を離れたところ、鯨石になったという(三石川の焼串岩)。実際の寄り鯨の権利については、アイヌ社会では地域により、あるいは時々条件によって決められていたのかもしれないが、幕府の管轄下においては、本州以南と同様に三分の一が地元のものとなった。三分の一は場所請負人、三分の一は箱館奉行所に属した(菊池2002)。明治期の噴火湾の事例では、長万部の3人が撃った鯨が沖に出て行き、天候も悪くなったので銆網を切り放した。7日目に礼文華の人が沖でその鯨を見つけ、礼文華に引き上げた。肉は礼文華が1、長万部が2の割合で分けた(名取1945)。

### 地形の伝説

寄り鯨は地形の伝説も生んだ。飢饉になった日高の人々がエトモ(室蘭)をめざしてやってくるとエトモには天然痘が流行していて集落の人々は避難していた。日高の人々はしかたなく歩き続けイタンキ浜のところまできて、沖に鯨が流れていると思って待っていたがそれは岩礁だったので、人々は死んでしまった(永田方正『北海道蝦夷語地名解』)。沿岸各地には地形を鯨形にみなした伝説があり、内陸では津波によって流されてきた鯨ということになっている。創造神が鯨を焼いたときの尻餅の跡や、戦いの作戦として寄り鯨を偽装して相手をだますという話もある(更科1981)。これらの伝説のなかには幕末期に記されたものもある。フンベオマナイ<鯨がいた沢>のような地名も知られている。ただし、鯨をフンベというが、アザラシをも「小さなフンベ」というという情報もあり(更科1976)、口承文芸のうちの同じ物語で主人公のトドと鯨が入れ替わったものもあるので、フンベとされている伝承にアザラシ、クジラ、トドの混淆の可能性もないとはいえない。ともあれ、これらの伝説が生まれた背景は、鯨が身近な存在であったというより、望んでも得られなかったり、大昔のこととして語られたりする、遠い存在になっていることを示すような気がしてならない。いずれにしても、積極的な捕鯨を示すものではない。

### イルカ漁

ところで、小型鯨類であるイルカの漁は行なわれていた。これも噴火湾の礼文華についてであり、どのくらい広い地域で行なわれていたのか不明である。油をとることが記録されている(1786年『東遊記』)。注目したいのはイルカの名称である。イルカのことは総称でタンヌというが、テレケ・チロンヌブという名称もある。大量に獲られたキツネ(チロンヌブ)やシマリス(ルオ・チロンヌブ)、カワウソ(ウォルン・チロンヌブ)などと同様にチロンヌブ<我々がどっさり殺すもの>という名称も持つ(知里『アイヌ語分類辞典』)。この名称の背景には交易品としての生産があると考えられ、鯨の加工品(石焼鯨、棒鯨、鯨油)の中には、イルカも含まれているかもしれない。鯨にはこのような名前はない。名称の面からいって、獲物としての鯨はイルカと同一視されてはいない。

アイヌは寄り鯨を食べ、生活物資の材料にもしていたし、交易品にもした。自然に浜に上がった寄り鯨の利用自体はふつつ捕鯨とはいわないが、「捕鯨文化」という場合には寄り鯨の利用を捕鯨文化の一環とみなしている考え方もある。しかしそれは、利用していることを積極的な捕鯨行為の根拠としていることであり、人間の行為としては与えられた鯨の利用と捕りに行くことは別のことである。沖を漂う傷ついた流れ鯨を浜に引き上げることは別にして、今のところ、17

世紀以降のアイヌはふつうの意味での捕鯨をしたといえるかどうかを確定することはできない状態である。弓矢の捕鯨の実態もよくわからない。しかし、アイヌに存在した捕鯨文化は、どのように捕獲したか、どのように利用したかということのほかにも考えることができると思う。



図2 イルカ漁（菅江真澄『えぞのてぶり』より 出典：『菅江真澄民俗図絵』岩崎美術社、1989）

### 狩猟文化の一環としての捕鯨

明治期の噴火湾アイヌの捕鯨の実況をみると、アイヌ捕鯨文化の一面は、技術面でも心性の面でも海獣狩猟や大型魚類を突く漁と同じであることがわかる。沖で魚を獲っていた午前9時ごろに鯨と遭遇し、舟から鉆を打ち込むと鯨に曳き回され、沿岸の集落から応援の舟が十数艘やってきて鉆を打ち込んだ。5, 60本の綱が付く鯨に人々ははずぶぬれになって猛スピードで真っ暗な中を曳かれ続け、鯨が浜に突っ込んで絶命したのは翌朝8時ごろのことであった。道南の太平洋側で行なわれていたカジキマグロ漁にかかわる神謡（アイヌ口承文芸のジャンル名）はカジキマグロが語る形式である。「浮き寝していたところ二人が乗った舟の舳先から鉆を打たれた。人間に捕られれば神として敬われるといわれたが、鉆がずぶりと突き刺さったまま東へ逃げ、引き返して西へ逃げた。人間は鉆綱の端を手にして雄たけびをあげながらがんばっていた。なおも東へ逃げていると一人は血豆を生じ、西へ曳き回すと、とうとう彼は斃れた。また西へ東へ曳き続けているともうひとりも血豆を生じ、疲れて、イラクサ製の鉆綱を切った。そのとき人間は呪う予言をしたがそのとおりのひどい目にあって、沙流川の川口の西側に打ち上げられ、悲惨な死に方をした。」（久保寺1977 神謡67, 68大意）。クジラとカジキマグロ、獲物と狩猟者の視点が代わっているだけで同じ世界であることがわかる。

また、登別から室蘭にかけての地名が現れるカワウソの神謡では「刀を研ぎ澄ましてから沖漁に出かけ、大鯨の化け物が浮き寝していたので鉆で突いた。するとそれからはるかに、鯨に海を曳かれて東のほうに西のほうに引き回された。手のひらにも甲にも血豆ができて泣きながら引っ張られていった。沿岸のいくつもの山の神に助けを頼んだが断られ、アヨロ岳の沖を通ったときその神に頼んだら強い雲をよこして、針を曲げて作った釣り針で引っ掛けて陸へ釣り上げてくれ

た。』(前掲書、神謡26)という。登別のフンベサパ(フンベ山)にまつわる伝説では、刀をもっていることを思い出したカワウソが化け物鯨を真二つに切ったがその頭のほうがフンベ山ということになっている。これらはアイヌにとっての捕鯨行為の性格を示している。

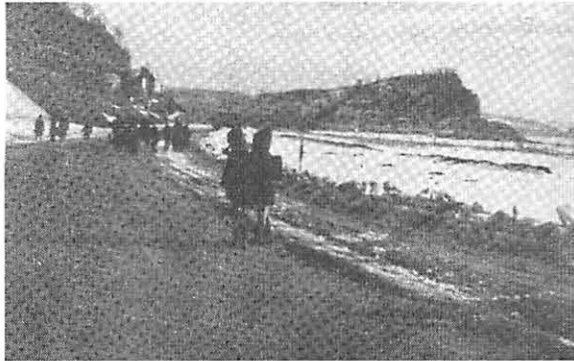


図3 登別のフンベ山(出典:知里真志保「幌別町のアイヌ語地名」『北方文化研究報告』13、1958)

### 寄り鯨の意味

アイヌの捕鯨文化の要素の二つめとして、物語にみえる寄り鯨について紹介しよう。ひとつのパターンは、娘をシャチの妻にすることによって、毎年鯨を恵まれるという筋である。たとえば、岬の上で父親が娘を子守しながら、結婚相手には熊がよいか、オオカミがよいか、誰がよいかと高い高いをしていると、手からすべって落とした娘をシャチが受け取る。そのかわりに毎年鯨1頭半が寄りあげられる(金田一1931)。「鯨一頭半」は子連れ鯨の表現と考えられ、じっさいに沿岸に回遊してくる鯨の反映であろう。その鯨を浜へ上げるのがシャチであり、物語は人間がシャチとの関係を結ぶことによって食料の恵みを得たことを語っている。このシャチとの異類婚の物語はシャチを父系のしるし(家紋)とする家系に結びついている。

別のパターンに、シマフクロウが寄り鯨を保証する物語がある。シマフクロウが人間のためにシャチに寄り鯨を頼む神謡で、「川に沿って村まで下ってきて眺めたら、ポノキキリが立てた祭壇があったのでその中に身を休め鳴いていると、ポノキキリに悪口を言われて追い払われて帰った。ある年、同じように下り、サマエクルの村で同じようにしていると、ていねいに礼拝され、ありがたく思っ帰った。そのうち、飢饉になったことを聞き、レブンカムイ(シャチのこと)に知らせを送ってサマエクルの村に子持ち鯨を3回送ったので、たべものがたくさんになった。ポノキキリの村はみんな死んでしまった」(浅井1979)。

シマフクロウはシャチとちがってじっさいの寄り鯨と直接の関連はないと思われるが、集落を守る、位の高い神で、飢饉時の救いの役割をもつ伝承は広く流布しており、その一環として寄り鯨にも結び付けられていると考えられるが、自身の権能ではなく、シャチに頼むのである。シャチが鯨を送り届けてこそ人間が得られるのであって、人間が直接鯨を獲るのが常態であればこれらの口承の物語の内容は成り立たない。

### 鯨への儀礼

信仰や儀礼の面からみると、体系的なアイヌの神観念において鯨は海の神であるシャチの下位にある。鯨祭りとか鯨送りと言われる行事は鯨を得た喜びの表れであり、寄り鯨を期待する呪的行事とまではいえるが、鯨をシャチと同様の神とする観念はみられない。鯨送りの祈り言葉に、来てくれたことを感謝し、また来て欲しいと言うのは、人間に捕られることがその動物にとって

も好ましいことであるという、狩猟という営みや獲物の霊に対するアイヌの基本的な考え方である。鯨をまつことはアイヌ語でノミ (nomi) という言葉が使われるが、決して熊やシャチの場合のようにイオマンテと言うことはない (名取)。



図4 昭和13年、再現された長万部のクジラ儀礼  
(出典：アイヌ文化保存対策協議会編『アイヌ民族誌』第一法規出版、1970)

つまり、鯨を人間に恵むのはシャチであり、シャチへの崇拝が捕鯨文化に作用しているのである。シャチも鯨の一種だから、アイヌの認識でも鯨に与えているフンベ (フンベ) という名称を使ってシャチをカムイフンベ<神であるクジラ>と呼ぶ。しかし、シャチは他の鯨類とははっきり区別されている。

鯨にまつわる芸能として、ウポポと呼ばれる歌やリムセという歌舞が太平洋岸に伝えられているが、寄り鯨や、シャチが鯨を追うさまや、鯨を隠喩に使った内容である (日本放送出版協会1965)。



図5 白老のクジラ踊り (出典：アイヌ文化保存対策協議会編『アイヌ民族誌』第一法規出版、1970)

それらはやはり鯨に期待し感謝する芸能であるが積極的な捕鯨を意味しない。

### まとめと課題

大いなる資源である鯨を積極的にはとらなかったことを、技術や装備の不足によりアイヌには不可能であったからとは考えない。また、アイヌは狩猟に毒を使用するが、明治になって法律により毒の使用が禁じられたために捕鯨が廃れたということでもない。鯨の利用や感謝はむしろ人間が鯨を捕らないという方向に働き、シャチを沖の神として崇拝することがアイヌの捕鯨文化だと考えてもいいのではないかと思う。噴火湾の捕鯨は、鯨の回遊に恵まれた湾という自然条件と、湾岸の集落が親戚関係にあって応援を得られる社会的条件のもとに行なわれえたものといえるだ

ろう。沖漁の最中に比較的小型の鯨を発見した場合に、鉾を打ち、命を賭けて鯨獲りの栄誉を得ようとするのは狩猟者として当然の行動なのであり、成功すれば、肉をもってきてくれたことを鯨に感謝することと、シャチを頂点とする海の信仰との矛盾はない。登別のフンベ山について知里真志保は、もともとアイヌは海洋民であって、古くは巨大なクジラが海の神であったと考え、その名残がフンベ山にまつわる退治される巨大鯨の伝説であるとしている（知里1958ほか）。鯨は刀で切るものとされていることにも隠された意味があると思われるが、神であるから捕らないというのはヒグマについてはあてはまらない。基本的には非常に危険をとまなう狩猟をする必要があるかどうか、寄り鯨の数量的な資料を追求しなければならない。

アイヌの捕鯨文化の解釈としては、海獣や陸獣まで含めた狩猟文化全体、延いてはアイヌ文化全体のなかで、鯨を人間が積極的に獲りに行くことの意味をアイヌが見出していたかどうかを見る必要がある。鯨はシャチが恵んでくれるものであり、それを自然の摂理とみなす精神文化が形成されているのが17世紀以降の北海道のアイヌ文化でありアイヌの捕鯨文化なのである。

#### 参考文献

- ・秋道智彌 1994『クジラとヒトの民族誌』東京大学出版会
- ・浅井亨 1979『日本の民話 北海道』ぎょうせい
- ・知里真志保 1958「幌別町のアイヌ語地名」（『北方文化研究報告』13）
- ・福本和夫 1960『日本捕鯨史話』法政大学出版局
- ・北海道庁 1940『北海道の口碑伝説』日本教育出版社
- ・岩崎まさみ 2002「アイヌ民族クジラ利用文化の足跡をたどる」『北海学園大学人文論集』第21号
- ・門崎允昭・関秀志 1999「蝦夷地における動物相の文献学的研究」（『北海道開拓記念館調査報告』第38号）
- ・菊池勇夫 2002「石焼鯨について—アイヌの鯨利用と交易」『東北学』7
- ・金田一京助 1931『アイヌ叙事詩ユーカラの研究 第一冊』東洋文庫
- ・久保寺逸彦 1977『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』岩波書店
- ・釧路市総務部地域史料室 2006『釧路捕鯨史』釧路市役所
- ・森田勝昭 1994『鯨と捕鯨の文化史』名古屋大学出版会
- ・名取武光 1945『噴火湾アイヌの捕鯨』北方文化出版社（1972『名取武光著作集 アイヌと考古学1』北海道出版企画センター所収「北海道噴火湾アイヌの捕鯨」）
- ・日本放送出版協会 1965『アイヌ伝統音楽』
- ・更科源蔵 1981「アイヌ伝説集」（更科源蔵アイヌ関係著作集1、みやま書房）
- ・更科源蔵・更科光 1976『コタン生物記 2』法政大学出版局
- ・柴達彦 1986『鯨と日本人』洋泉社
- ・渡部裕 1992「アイヌの海獣狩猟」（『北海道立北方民族博物館研究紀要』1）
- ・渡部裕 1993「蝦夷地における動物名称の認識とアイヌの生業」（『北海道立北方民族博物館研究紀要』2）
- ・山下渉登 2004『捕鯨』1・2 法政大学出版局